

8月24日(木) 午後7時～
小張愛宕神社 (小張 3235)

小張松下流綱火

戦 国時代末期から江戸時代初期にかけて小張城主であった松まつ下石見守重綱しげつな公が考案したものと伝えられている。

戦勝祝いや犠牲者の供養のために陣中で行ったと伝えられており、重綱は鉄砲を扱う火薬師であったとも言われている。

家臣として仕えていた大橋おほはし吉左衛門きちざえもんが、重綱から火薬の調合法などを伝授され、松下流と命名。以来、400年以上にわたり、その技法は大橋家に受け継がれてきた。

毎年行われる小張愛宕神社の祭礼は、8月23日の夕方に「繰り込み」を行い、翌24日に綱火を奉納する。現在は火難除け・五穀豊穡を祈願して奉納し、小張松下流綱火保存会が保存・伝承をしている。今回の取材では、綱火保存会の会長である山口勝弘やまぐちかつひろさんと、小張松下流綱火・家元の大橋健一おほはしけんいちさんに話を伺った。



無形民俗文化財 走

小張松下流綱火



梅 雨の最中の7月初旬、小張小学校を訪ねた。小気味良い笛の音が響く。ドドン、ドドンと校舎に太鼓がこだまする。

この日は、小張小学校で子ども綱火の練習が行われていた。子ども綱火は、小張松下流綱火保存会による指導の下、子どもたちがお囃子や、綱火の操作技法を覚え、小張小の秋まつりで披露する行事だ。この子ども綱火は、今年で26年目を数える。お囃子は、8月23日に行われる愛宕神社祭礼の「繰り込み」でも披露される。

校舎裏手の斜面を下ると広場がある。その広場に、3本の柱が立てられ、柱と柱を結ぶように、数本の綱が張られていた。斜面を利用し、綱火に必要な高低差を確保する。高台に建つ小張小の立地を生かした練習場所



だ。その綱に、人形が吊るされている。人形の滑車からのびる8本の綱は、小張小学校の子どもの手に握られている。皆、真剣な表情だ。1番から8番まで割り振られた8本の綱には、それぞれ人形を前進させる綱、方向転換をする綱など役割が決まっている。それを引いたり緩めたりしながら、人形を操る。「1番さん引いて」。小張松下流綱火・家元の大橋健一さんの声が響く。「ゆっくりゆりゆりゆりゆり」。人形があげられないように。子どもたちに声をかけ、綱と人形の動きを覚えこませる。

「ちよつとゆるめよう」「落ちてきてるよ」。何度も繰り返して練習しているうちに、コツをつかんだ子どもたちは、自然に声をかけあい、息を合わせるようになる。人形も滑らかに動くようになった。